
まさよしとSOLA その後の話 1

大蚊里伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まさよしとSOLA その後の話1

【Nコード】

N4637V

【作者名】

大蚊里伊織

【あらすじ】

まさよしとSOLAは、のんびりとリグライトで暮らしている。そんなある日、SOLAがやっかいごとを持ち込む。
中央都市の事件の後の二人と一匹の話です。

（前書き）

前に載せたまさよしとSOALAの続きですが、試しに読んでみるにはこの長さなら適当かと。よかったら読んでください。

食当たり、その後

覚えているのは青い空だった。

僕はそう思う。逃げていて、銃声が聞こえて、それが麻酔銃だと気づきながら、僕は倒れた。たぶん僕の行先は実験体だろう。次に気付いたときは研究所らしきところだった。

「おなかすいた」

と呟く。かプセルのようなところから出る。電気はすべてストツプしているようだ。

「なにかないかな」

「ごそごそして、歩いて、しばらくしてはったり倒れた。しばらくそっついていたんだと思う。よく覚えていない。」

「うーん」

「大丈夫か」

「え？」

人！

起き上がるつもりだったけどだめだった。

「おなかすいた」

「食べるか」

今度は起き上がった。

「携帯食だ、食べられるか」

「うん！ 食べます」

すぐく現金だと自分でも思いながら、僕は食べた。

「おいしい」

「そうか」

もしかもしや食べた。

「水飲むか」

「うん」

水筒をうけとり、「ごくごく」と呑む。

「はー、生き返った」

「人か？ お前」

「人造人間です」

と答えた。

「そうか」

「そうです」

あの

「これ持っていてくれませんか」

ポケットから袋を出す。

「わかった」

受け取ってもらえた。僕のたったひとつの持ち物だった。誰か来たら託そうと思っていたのだ。そのまま死んでも別にいいかなと思つてただけ、僕は生きていた。

「……名前は？」

「SOLA」

「ソーラ？」

僕は、長い銀の髪をうしろに流しながら言う。

「S、O、A、LでSOLAと綴ります」

「そうか、俺はまさよし」

「まさよし？」

「そうだ」

僕は楽しくなる。

「まさよしくんって呼んでいい？」

「いいぞ」

まさよしくんはしばらく考えた。

「ここから出るか？ 一緒に」

「いいんですか」

「ああ」

二人で外に出る。虹が出ていて、森の緑が目には焼きついた。研究所のような建物を出て振り返ると、つたがからまり、なんの建物なのか判然としない状態だった。

「雨が上がったな」

行くぞ、と言われてついていく。

ぬかるみに足をとられたりしながら、懸命に歩いた。

パブ、ホワイтスノウはそのころ老人がやっていた。ロウのおじいさんだった。今は隠居しているけれど、時々ごはんを食べにくる。「何か食べさせてやってくれ」

そのとき出たタラコスパで、僕はタラコスパが大好物になった。

あの香りが好きである。口に運んだときのしょっぱい感じが好きだ。

なんか食べたくなってきた。

食べてこよう！

下にいくと、ロウが午後のしたくをしていた。客はいない。

「タラコスパ！」

「そろそろ来るころだと思って作ってあるぜ」

「わああ」

おやつにタラコスパ。太らない僕は、長い髪も顔も、変わらない。それは僕自身が、認証キーだったからだ。で、実は魔力が主食なんだけど。それは内緒だ。

魔力は森を歩くだけで吸い取れる。でも、「身体」を維持するための最低量のごはんやたんぱく質の入った料理などは一応いるし、おなかがすけばへばる。

森から来る微量の魔力で、僕は生き延びたんだなあと思う。

「ふんふんふんふーん」

歌いながらフオークで食べる。

「お、旨そうだな」

まさよしくんが来る。

「おいしいよ」

「俺の分もあるのか」

「パスタなら10分で用意できるが」

「たのむ」

「おう、タラコでいいか」

「ああ」

タラコスパのタラコはタラという魚の卵だ。人工飼育水って言うて、淡水魚も海水魚も飼育が可能な水で育てられ、安く出回っている。

「おいしー」

「そうか」

タラコスパは、ロウのおじいさんの代から作られているらしいけど。

すぐにまさよしくんの分も出てくる。

食べ始める。僕はもう一皿注文する。

「どこに入っていくんだろうな、このパスタ」

ロウが言う。

「そうだな、異次元とかじゃないのか」

「異次元？」

ロウが聞き返す。

「なんでも、この世界と別の世界があって、次元っていうものがあるらしい。そこに魔力がたまっていて、そこから魔導師たちや錬金術師たちが魔法を引きだしているとかいう話だ」

「そんなもんなのか」

「みたいだな」

僕は、二皿目を食べてうれしくなってくる。

「おいしかったー」

「しかしまあ、お前がSOLA連れてきたときは、とうとうそっちに走ったかと思ったけどな」

ロウが口にする。

前に友人がいなくなったとき、お前ホントになんか恋人と別れたみたいだったもんな、こいつ男が好きなのかと思ったけどな。

「俺は」

まさよしが何か言いかける。

「うーんまあ、別にそうでもいいけど」

僕が言う。

「待て」

まさよしが口をはさむ。

「俺はそういうことに寛容だぜ？」

ロウが言う。

「そんなんじゃない」

「むきになるな」

「むきになってない」

「じゃあ、行つてきますー」

僕は、なんとなく二人きりにしたほうがよさそうだと判断して外に出る。

外に出て十分、女の人が倒れていた。子供がそのそばでじつとしゃがみこんでいる。

あわててかけよつてみやくを測るけど、もう亡くなつてるみたいだ。

とりあえず保安官に連絡しに走る。次に教会に人が亡くなったと言いに行く、子供を保護するのはいつもこの街ではまさよしの仕事だから、子供の手をひいて、街はずれのホワイトスノウへと連れていく。その子供は、静かに泣きもせずついてくる。痩せた手だ。と思った。

「ただいまー」

「おかえり」

ロウが言う。まさよしはなにか書いている。報告書かな。

「早かったな」

手を止めてまさよしが言う。

「うん、厄介事拾ってきた」

こっちこっち早く！　と言って、子供を連れてくる。まだ5、6歳だろう。

「母親はこと切れてたよ」

「わかった」

「とりあえず、死者一名で、保安官にも言ってきた」

「子供は」

とりあえず孤児院かなーまさよし君。

「そうだな」

「痩せてるな、なんか食べるか？」

ロウが言う。ミネストローネの薄いやつとかならいいか？　と、鍋を火にかける。

黒い目がいやに大きく感じる男の子だとたぶん思う。でもなんだか違和感がある。なんの違和感なのか、僕にも分からない。少し厭な予感がしたけれど、僕はミネストローネを食べ始める子供を見ていた。

「ばあさんのところに連れていくか」

今からだと夜に着くな、一泊するつもりで行くぞ。と、まさよしは言う。

「うん」

ジープに乗って、出た。

子供はなにひとつ言葉を発しない。ぼうつとした目をしている。

パンを渡したら、少しずつかじる。SOLAは、そのとなりに乗っている。ぽみゆが助手席だ。

モンスターは、二回出たが、まさよしの姿を見るといなくなるものと、あと、一瞥してさつていくものといった。バトルにはならなかった。

なんだろう。僕、いやな予感がするんだ。

「お前、魔力とか補充してるか」

途中で、休憩をとって、まさよしが言う。

「うん」

「光ってないが」

「ああ、光らない程度に吸収してるから」

人としての機能が全部停止しても、大丈夫なのだが、魔力を失うと全く動けなくなり、最後は死に至る、らしい。僕はそういう人造人間である。

魔力は森に多く、街にいるときは人からももらうが、街路樹に話しかけてからももらうこともある。魔力は僕自身が作る魔力と、補充する魔力とある。

まさよしくんは補充できないタイプの人間なので、魔力は自前のみである。力を倍にする魔法を使い、筋力を高めて、暴走状態になつて戦う戦法が使える。

「おまえ、倒れる前にちゃんと補給しろよ？」

「わかってるよ」

二度ほど倒れているのだ。

「生きるって難しいね」

「生かしてもらっていることを大切にしろつてばあさんに言われたなあ」

と言いあいつつ子供を見る。

「なにか食べる？」

と聞いてもただこちらをぼんやり見るだけだ。

「シヨツクだったからかなあ」

なにも食べる様子がないので、とりあえず車に乗せ、走り出す。夕方になり、無事ついた。歩きだと三日くらいは軽くかかる場所である。

「その子供は？」

検問で言われる。

「孤児だ、孤児院に預けに行く」

「わかった、一筆書いてくれ」

「名前は？」

子供に聞く。

「ケイム」

とだけ答えた。

それからジープで道を走り、孤児院につく。

「セイ」

「あ、まさよし、メールみたわ」

セイさんが言う。森の中は電波を食べる虫がいるため、ケーブルを通して魔法を使ってメールの受け渡しも行っている。

「いいか？」

「いいわよ、一人くらいなら。今年ここを出て行った子が三人ほどいるから大丈夫よ」

もう夕刻になっていた。僕はやっと一息して、子供を預けた。

「泊っていくがいいか」

とまさよしくんが聞く。

「いいわよ」

と、言われる。

「夕ご飯はまだ？」

「はい」

僕が元気に答える。

まさよしが干し肉にしたウシモドキを、車からひっぱり出した。

「これ食べるか」

「ええ」

夕食の食卓は、質素だが、手をかけたスープが出た。

「おいしー」

ごはんを食べて、部屋に通される。

いつも、ぼみゆと、まさよしと僕で1部屋だ。

連れてきた子供は、大部屋に入ったようで、子供たちは、あるが
ままに子供を受け入れているようだった。

「寝るよー」

「ああ」

あかりを消して、ベッドにもぐりこんだ。

夜中のことだった。苦しくて目がさめる。

「な……げほ」

首をしめられていたのだ。あわててその手を取ると、あの子供だ
った。

殺気はない。

「僕じゃなきゃ死んでるって」

部屋の中は暗かったが、目は慣れている。

「どうして僕を」

「テロを阻止したから」

と、子供は言う。

「僕は悪い魔法を飲んだだけだよ」

また馬乗りになってくるのをひっして払いのけようとしていると
ころで、少年の首に、しゅるんとなにかがまきつく。「ぼみゆ」

大きな声が出た。

「また寝言か？」

まさよしくんが起き上がる。僕の上に子供が乗っていて、ぼみゆ

がひきはがそうとしているのに子供が僕の首をしめようとしているのを見て、あわてて来る。

「邪魔をするなあ」

子供が、手をふる。まさよしくんがふっ飛ばされる。おとが出たのに気付いて、外からセイさんの声が聞こえる。

「どうしたの、まさよし」

「あけるな」

内側から、そうまさよしくんが叫ぶ。

「解呪」

僕が叫ぶと、子供は首をぐるんとまわしてから、トカゲのモンスターに変わる。

「遠隔操作」

僕が言う。どこか遠くで、このモンスターを操作しているんだと僕に分かる。魔力の湖のあるリグレートや、森の中では魔力の干渉で遠隔操作はうまく使えない。森が切れるところまで、子供が何の反応もしなかったのはショックだったからではない。

「お前は人間ではないな」

モンスターがそう言う。遠隔操作をしている魔法使いがしゃべっているのだ。

「あたりまえでしょ、普通の人間なら死んでる量の黒魔法を呑んだんだから」

僕は叫ぶ。

「では、首をしめたくらいでは死なないな」

モンスターの指先が尖る。

「心臓を貫けば死ぬだろう、黒魔法もここを中心に被ばくさせることができよう」

「何言ってやがる」

まさよしの渾身のこぶしが、とかげの頭をふつとばした。

ナイフを持って、馬乗りになると、首に一回、胸に一回、腹に一回つきたてる。

「ぎゃああああ」

遠隔操作の場合、相手にかなりの攻撃を反撃させることができる。
しばらく来ないだろう。

トカゲは動かなくなった。

朝日が登ってきた。部屋がうすあかるくなる。

トカゲが、静かに黒い砂に変わる。

僕はその黒い砂に触れ、白い砂に変える。

「まさよし、あの」

セイさんの声がする。

「ああ、あけていい」

「預かった子がいないのだけれど」

「ああ、その話をする、SOLA、話してもいいか」

「うん」

僕は、黒魔法を、早く消化しなきゃなと思った。早く。できるだけ早く。外に漏れても被ばくしないくらいまで。

（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4637v/>

まさよしとSOLA 其後の話 1

2011年8月4日03時26分発行